町が被害を受けている中で会社の復旧だけを優先させるわけにいかない

株式会社いすゞ北海道試験場

取締役 中島繁則さん
事業企画担当部長 佐野喜則さん
審査実験第一部 指導職 森本直人さん

――地震発生当日の状況を教えてください。

中島 私たち3人は苫小牧市に住んでおり、それぞれ自宅にいました。激しい揺れで飛び起きて、別の部屋に避難しましたが、停電で何が起こったのかわかりません。私の自宅は物が倒れた程度の被害で済みましたが、むかわ町の甚大な被害を知って、業務を行うことは困難と判断し、緊急連絡網で従業員に出社停止の連絡をしました。

中島 繁則さん

森本 目を覚ました直後に地震が発生しました。ニュースで震度6の大地震だったことを知りましたが、自宅があまり被害を受けなかったので、そのまま会社に向かいました。途中で上司から「事務所内は壊滅的で、テストコースはアスファルトが盛り上がり、車が乗り上げている」と連絡を受けました。

森本 直人さん

中島 業務推進部長として対策本部を立ち上げる立場にありました。「出社可能な役職員だけでも会社に集まって対策を検討しよう」という話になり、むかわ町に向かったものの、信号機は止まり、道路には亀裂が生じて段差が出来きるなど、危険な状態でした。メールで通行可能な道路を連絡し合い、朝8時には主要メンバーが会社に集まりました。

テストコースや整備工場の被害は思った以上に大きかったので呆然とし、「このまま（テストコースが）使えなくなるのではないか」という不安がよぎりました。比較的被害が少なかった建屋の玄関ホールに机を並べて対策本部を設置し、これから何をすべきか話し合いました。

――最初に何をしましたか？

中島 まずは社員と家族の安否確認です。むかわ町市街地にあった社員寮には単身者29名と出張者34名がおりましたが、全員の無事を確認。朝10時までに従業員や家族に負傷者がいないことがわかり、胸をなで下ろしたことを鮮明に覚えています。

森本 寮に立ち寄ると、呆然とたたずむ従業員たちの姿が目に入りました。入ることがためらわれるほど内部の被害は大きいと言います。ここで生活を継続するのは困難と判断し、「注意して私物を持ち出すように」と告げました。若手社員には土地勘のない出張者の対応を頼みました。

近くの鵡川中学校が避難所になっていることがわかり、全員で移動しました。寮からベッドマットや発電機など、使えそうな物を残らず運び出し、ほかの避難者の皆さんにも使ってもらいました。会社からは「方針が決まるまで、そこで避難してほしい」と伝えられていました。

――親会社であるいすゞ自動車も支援に動いたそうですね。

佐野 いすゞ自動車では、東日本大震災を教訓に各工場で災害用物資を備蓄しています。発災当日の9月6日、本社から支援物資を集めて送ると連絡がありました。いすゞのトラックを使っている運送会社の社長さんが心配し、自らトラックを運転して支援物資を工場まで届けてくれたこともあったそうです。

佐野 喜則さん

9月10日に中型トラック2台と大型トラック1台が到着しましたが、想像を超える量で、むかわ町役場の方と手分けをして避難所の倉庫に運びました。まだ支援物資が本格的に届き始める前の対応だったので、とても感謝しています。

――いち早くボランティア活動に立ち上がりましたね。

森本 自宅待機を命じられていましたが、苫小牧在住者には被害を受けていない者が多く、今何をすればよいか、連絡を取り合っていました。これまでの災害を見てもボランティアが必要になることは明白でしたが、勝手に行動することはできません。そこで、「町で多数のボランティアを必要としているのであれば、私たちに協力させていただけませんか」と社長に申し入れしました。

中島 会社としては、1週間の自宅待機のあと、会社の復旧作業に当たってもらう考えでした。一方で町の復旧にボランティアは必要です。「町が被害を受けている中で会社の復旧だけを優先させるわけにいかない」という判断になりました。

森本 町内に住んでいる従業員は家の損壊が大きく、すぐには業務に復帰できない。寮住まいの従業員たちは避難生活を続けており、作業に参加させることは困難。ボランティアはおもに苫小牧在住者で組織しましたが、会社の復旧作業を含め、人のやりくりが難しく、何をするにもぎりぎりの人数でした。

膨大な災害ごみを連携して処理し、迅速な復旧に貢献（いすゞ北海道試験場社員とむかわ町職員一同）

初めは個々がボランティア登録をして活動する予定でしたが、佐野から「会社としてまとまって組織的に活動をしたほうが役に立つかもしれない」と言われ、むかわ建設協会と合同で災害ごみの集積場を担当することになりました。

――災害ごみ集積場ではどんな活動をしたのですか？

森本　ボランティアは任意参加としましたが、慣れの必要な作業が多いため、数日連続して参加することを原則として、新しく参加した者に作業を引き継ぐことのできる体制を整えました。

佐野　弊社からは延べ222名、1日当たり20名前後がボランティアに参加しました。最初は自衛隊、後半は建設協会と合同で作業をしました。

森本　ごみの受付時間は8時45分から15時まで。15時を過ぎると、産業廃棄物処分業者が引き取りに来ます。業者ごとに焼却できるものが異なるので、どこの業者が来ても処理できるように、ごみは片っ端から解体し、分別しました。処理費用が発生する家電ごみは要員を配置して、持ち込んだ人や型番を記録しました。

佐野　9月の3連休では、災害ごみの集積場となった運動公園から国道までトラックが連なり、交通誘導も行わなくてはならなかったので、お昼を食べる暇さえありませんでした。

森本　仕事柄、解体作業や重機の扱いには慣れているんです。工具やヘルメットなども職場のものを持ち寄りました。ガラスを扱うにしても、どこを触われば安全か、普通の人よりふまえています。一般のボランティアには難しくても、私たちならばできることもありました。

――苦労されたことは？

佐野　例えば、ベッドマットは分解して布とスプリングに分けることになっています。それでも、そのまま持ち込む人が跡を絶ちません。「お持ち帰りください」とは言えないので、こちらで対応せざるを得ませんでした。

森本　大量の段ボールや生ごみなど、震災と関係ないごみや、明らかに町外のごみを持ち込んでいるケースも見られました。一度受け取ると次々と持ち込まれるため、断固拒否しなければならない。中には食ってかかる人もいましたが、そうした行為は復旧の妨げにしかなりません。違法なごみを受け取ると不法投棄を認めたことにもなりますので、そのような場合はきっちりとお断りしました。

次々と運び込まれてくる災害ごみを分解、解体

――ボランティアとしていつまで活動されていたのでしょうか？

佐野　最初はボランティアの活動期間を定めていませんでした。震災から1週間ほど経過してごみの量が減ってきたため、9月30日までという期限を設けました。最後の駆け込みはすごかったですね。

業務上の経験を活かした分解作業

――令和2（2020）年4月、社名を「株式会社ワーカム北海道」から現在の社名に変更したのも胆振東部地震が契機になったと聞きました。

中島　親会社であるいすゞ自動車から全面的な支援を受けたことでグループ会社としての認識がいっそう高まったことや、震災復旧を通して地域との結びつきを強く感じたことから、いすゞと北海道の地名を入れた社名とし、会社施設の復興を機に変更しました。

――被災後に再建された寮は避難所としての機能があるそうですね。

中島　震災時には、いすゞグループの従業員約60名が避難しました。感謝の気持ちとして再建した寮には、避難所として利用できる機能を持たせました。先般、むかわ町と寮の所有者であるいすゞ自動車、管理を担当する弊社の三者で防災協定を締結しましたが、震災がなければこうした機能を取り入れることはなかったと思います。

――最後に、むかわ町の皆さんへメッセージをお願いします。

佐野　私は町の剣道連盟に所属して、小中学生に剣道を教えています。剣道を通して、これまで以上に人間形成のお手伝いをしたいと考えております。今後ともむかわ町のために頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

森本　集積場のほかに、個人ボランティアとして住民の方々の被害状況の調査を担当しました。町民の協力により、スムーズに実施できたことを感謝しています。大きな町では難しい人とのつながりをたくさん感じました。今後も一緒に頑張っていきましょう。

中島　再建した弊社の寮は「むかわハウス」と名づけましたが、社内公募により「つながり」「絆」などを意味する「ネクサス（Nexus）」の愛称もつけました。震災によって弊社とむかわ町とのつながりを強く感じましたし、これからも絆を強く持って、お互いに協力し合いたいと考えています。今後ともよろしくお願いします。